

8. 婚姻について

宮西智子

- I はじめに
- II 通婚圏
- III 婚姻からみる家と家、人と人とのむすびつき
- IV 結婚
- V まとめと考察

I はじめに

結婚は、ただ単に夫婦という2人の人間をつなぐだけのものではなく、家と家、そしてそれを取りまく社会を結びつける重要なものである。二俣の中では誰もが親戚どうしのように、目には見えないけれど何か無数の糸で二俣の人と人、家と家が複雑につながっているように感じた。そのつながりというのか親密性はただ単に地縁的なものからきているのか、それとも婚姻や血縁からきているものなのかは具体的にははっきりとわからなかった。

今回の調査でいろいろな話を聞いていく中で、大体1930年代から1990年ごろまでの結婚について聞き取ることができ、婚姻のやりとりについても多数の資料を得ることができた。そこで、結婚という視点から二俣の社会における人と人のつながりをみていきたいと思う。

II 通 婚 圏

調査を行なった時点では、二俣には124世帯の人が住んでいたが、約半数の家に行って記憶しているかぎりの婚姻について聞くことができた。聞き取った中には今は転出してしまっている家もあったが、婚姻が二俣の中にいた時に行われた場合には二俣内の家として扱った。

聞き取ることのできた資料の中の婚入者のうち、年齢と出身地のはっきり判るものだけを対象として年齢別に出身地をまとめたのが表-1である。

年代別にみていくと次のようになる。

① 80代以上

ほとんどが二俣内での婚姻である。二俣以外の場合でも二俣からでていった縁者である。紙漉きがさかんに行われていたころには、女性が紙を漉くということもあって嫁は二俣内からもらっていたからだという話をよく聞いた。

② 50・60・70代

やはり二俣内が多いが、富山県側からの婚入者がふえている。富山からの7件のうち、福

光は婿もいれると5件、城端は2件となっている。二俣はちょうど石川県と富山県の県境近くの山あい位置しており、県境の富山県側である福光や城端と交流があったことがうかがえる。50代でも前半の人は二俣以外からの人が多くなる。

③ 30・40代

この年代から急激に二俣内での結婚が減る。それと同時に金沢市近隣の地域へと通婚圏がひろがっているのがみてとれる。

④ 20代

資料が少ないが、通婚圏がさらに全国規模にまで広がっていることがみてとれる。

表-1 二俣への婚入者の年齢別出身地（カッコ内はそのうちの婿の数を表す。）

| 婚入者 年齢 (1992年) | 二 俣 | 二 俣 近 辺 | 金 沢 市 | 金 沢 市 近 郊 | 石 川 県 そ の 他 | 富 山 県 | そ の 他 の 県 | 計 |
|-------------------|--------|------------------|-------------|-----------------------|----------------------------|-------------|-----------------------|--------|
| 80以上 | 12 | 1 | 1 | | | | | 14 |
| 70 ～ 79 | 8(1) | | | | | 1 | 2 (神戸1 北海道1) | 11(3) |
| 60 ～ 69 | 16(2) | 2(2) | | | | 3(1) | | 21(5) |
| 50 ～ 59 | 9 | 1 | | | | 4 | 1 (北海道1) | 15(1) |
| 40 ～ 49 | 1 | 2 | 4 | 1(1) | 2 | 1 | | 11(1) |
| 30 ～ 39 | 1 | | 4 | 2(1) | 3 | | 福井1 | 11(1) |
| 20 ～ 29 | | | 1 | 2 | | | 北海道1 横浜1 | 5 |
| 計 | 47(3) | 6(2) | 10 | 5(2) | 5 | 9(1) | 6(3) | 88(11) |

次に、聞き取りにかたよりがあるために不確実ではあるが、婚姻全体と特に婚出先からみた通婚圏をみてみたいと思う。聞き取ることができた婚姻の総件数のうち婚入元と婚出先がわかる婚姻全てを世代別に二俣地区内、地区外からの婚入、地区外への婚出の3つでわけ、婚出先をまとめたのが表-2である。まだ子供が結婚していない夫婦を第I世代として世代がさかのぼるにつれて数字も大きくなるようにした。

表－2 婚姻全体と婚出先（カッコ内はそのうちの婿の数を表す。）

| 世代 | 二俣内 | 二俣外からの 婚入 | 二俣外へ 婚出 | 婚出先の内訳 | 計 |
|----|---------|--------------|------------|--|----------|
| V | 2 | | | | 2 |
| IV | 12 | 1 | | | 13 |
| Ⅲ | 52 | 4 | 11 (1) | 金沢市9 (1) 富山1 横浜1 | 67 (1) |
| Ⅱ | 51 (3) | 14 (5) | 40 (1) | 田島2 金沢市22 (1) 金沢市近郊6 その他石川県内4 大阪3 京都2 静岡1 | 105 (9) |
| I | 2 | 36 (7) | 36 | 金沢市20 金沢市近郊8 その他石川県内3 京都3 東京1 大阪1 | 74 (7) |
| 計 | 119 (3) | 55 (12) | 87 (2) | | 261 (17) |

二俣外への婚出先の内訳をみると、金沢市及びその近郊が最も多いことがわかる。嫁として二俣へ来る人は県内が多いとしても様々な地域から来ていたのに対して、嫁として出ていくのは金沢内とその近郊が圧倒的に多い。資料の数にかたよりがあるために詳しくはわからないが、60代や50代で婚入者の出身地が富山が多かったのに対して、婚出先としては富山県というのはい少ない。また、京都や大阪といった関西方面に出ていく傾向があるようだ。

さて、表－1、表－2でカッコ内に示した数字は婿の数をあらわしているのだが、子供が女姉妹ばかりであった場合には姉妹のうち誰かが家に残って婿を取り、家を継いでいる。やはり二俣内の婚姻が減る頃には二俣の外から婿養子が来て家を継ぎ、二俣から金沢などへ通勤しているようだ。

養子については数字を挙げなかったが、家が途絶しそうな場合には二俣内に限らず養子がもらわれてきた。兄弟の多い家からは何人かがいくつかの家に養子にでており、さらに二俣の人々のつながりを深めている。また、「両もらい」といって、養子を1ヵ月ほど先に家に入れて夫婦ともいっぺんによその家からもらって家を継がせるという例が1件あった。

Ⅲ 婚姻からみる家と家、人と人との結びつき

二俣の中では実際に嫁のやりとりがかなり盛んに行われていて、それによって家と家がつながっていることがⅡからみてとれる。このつながりは不規則的でどの家にも何の関係もなく広がっているものなのか。この複雑な結びつきの糸を少しでもほぐしてみることはできないであろうか。この二俣の中での嫁のやりとりには何か傾向がみられるのではないだろうか。

そこで、つぎの3点から婚姻関係をみてみることにした。

- ① 家格による結びつき
- ② 地区別による結びつき
- ③ 門徒組織による結びつき

ここで扱う表-3～5は、表-1でみたように二俣内の婚姻が多かった50代以上を対象として、婚入者の現在の年齢で80歳を境目として50～70代と80歳以上にわけた。80歳を境目にしたのはⅡの表-1でみたように、二俣外からの婚入の有無という点ではこれ以前と以後で違いがみられるのではないと思われるからである。また、年齢がはっきりとわからないものについてはおおよその推定で含めることにした。

1. 家格による結びつき

二俣では10戸のおやっさま、その10戸を含めた20戸の組頭、さらにその20戸を含めた三十五人衆という家格による階層のようなものがあって、今でも名残が残っているが、昔は家格がかなり重要であった。婚姻もそのような家格の釣り合う家どうしで行われていたようである。そこでおやっさま、組頭、三十五人衆それぞれで互いにどのようなやりとりが行われていたのかを表にしてみた。組頭の20戸にはおやっさまの10戸が、三十五人衆には20戸の組頭がそれぞれ含まれているので、実際には組頭はおやっさまを除いた10の家、三十五人衆は組頭を除いた15の家ということになる。もっとも組頭や三十五人衆のなかでは入れ替わりや転出があったようで、聞き取った10・20・35の家の数は絶対的なものではなく、15戸の三十五人衆のうちわかっているのは11の家である。また、三十五人衆には入っていないくても、おやっさまの家の分家であったりすると、本家であるおやっさまとの関係から上の層のように扱われたようであるが、それについては後でふれていきたいと思う。

表-3 家格による婚姻のやりとり（カッコ内の数はその内の婿の数を表す。）

80歳以上

| 実家 婚出先 | おやっ さま | 組 頭 | 35人衆 | 35人衆 以 外 |
|-----------|-----------|-----|------|-------------|
| おやっさま | 7 | | | 3 |
| 組 頭 | 2 | 3 | 1 | 7 |
| 35 人 衆 | 1 | 2 | 3 | |
| 35人衆以外 | 1 | 7 | 4 | 12 |

50～70代

| 実家 婚出先 | おやっ さま | 組 頭 | 35人衆 | 35人衆 以 外 |
|-----------|-----------|-----|------|-------------|
| おやっさま | 1 | 2 | | 3 |
| 組 頭 | 1 | 2 | | 5(2) |
| 35 人 衆 | 1 | 1 | | 2 |
| 35人衆以外 | 4 | 5 | 2(1) | 20 |

(1) 80歳以上

まず目につくのはおやっさまどうしのやりとりである。この中で、A家からは3代にわたって4人の嫁がB家に嫁いでいる。三十五人衆以外の家に嫁いでいるのが1件あるが、これはおやっさまの家から次男として分家した人のところへ嫁にいったものである。三十五人衆以外からおやっさまの家に嫁いでいるうち2件は、すでに転出してしまっているが、昔はおやっさまと同じぐらいの格であった家からである。もう1件は、三十五人衆の中には入っていないが当時は経済的に豊かであったのではないかと推測されるC家で、そのことはこの一族が組頭や三十五人衆と他にもやりとりをしていることからうかがえる。

組頭、三十五人衆の場合は、それぞれ同じ家格どうしのやりとりもみられるが、組頭と三十五人衆以外の家とのやりとりが目につく。組頭から三十五人衆以外の家にいったうち、2件がおやっさまのわりあい新しい分家のところへ嫁にいったものである。また1件は本家から分家へいっており、1件は祖父が養子にいった家へ嫁いでいる。さらに1件は、上でのべたCの一族のところへいったものである。三十五人衆以外から組頭の家のところへいったものをみても、そのうち2件はおやっさまの一族のところからであり、1件は隣の家から嫁いだものであり、もう1件はCの一族からである。

三十五人衆以外の家どうしのやりとりの中には、隣の家嫁いだといものが2件あった。

(2) 50～70代

80歳以上のものに比べて傾向がはっきりしないが、あまり家格にこだわらなくなっているといえる。それでもおやっさまから三十五人衆以外へ嫁いだもののうち、2件はおやっさまの分家へ、1件は転出してしまったが経済的に豊かであったと思われる家へいっている。また、三十五人衆以外からおやっさまへ嫁いだもののうち、2件はおやっさまの分家、1件はCの一族の家からである。組頭と三十五人衆以外のやりとりについてみても、70代ではそれでもある一族の本家などとのやりとりであるが、それ以降は家格にこだわらなくなっている。この年代の人達が結婚するのは戦中戦後の時期で、家格と経済的な状況がちぐはぐになっていて、まだ二俣の中での結婚が多いとしてもだんだんと家格による差が小さくなっていったのではないだろうか。

このようにみると、昔、おやっさまが地主として村をしきり、組頭が組の者の親であるかのように組をしきっていた頃には、権威を維持し上下関係が逆転しないように上の階層では上の階層の中で婚姻関係が結ばれていたようである。親戚関係を結んで権威をより大きくするのはもちろん、結婚式はかなり盛大におこなわれるために、その費用を賄えるような財力をもっているような家でないと結婚はむずかしかったのかもしれない。しかし、おやっさま・組頭・三十五人衆といった村の運営組織の実際の内容が、経済状態などとかみあわなくなって薄れていくにしたがって、家格は婚姻に関してはそれほど影響を及ぼさなくなっていくとみること

ができるのではない。さらに通婚圏が広がって二俣内での婚姻は減り、表には挙げなかったが40代以下では二俣内での婚姻は30代と40代で1件ずつであり、それはいずれも家格との関係はみられない。現在では家格は問題とならなくなっているようである。

2. 地区別による結びつき

二俣は森本川を挟んで下出・北島・上出の3つの地域にわけることができる。子供の頃は遊ぶときなど地区別にまとまり、神社の祭りの時などはそれぞれに団結して対抗していたそうだ。そのような地区別の対抗意識や団結といったものが婚姻と何か関係があるかどうかをみるために、表-4にまとめてみた。

表-4 地区別の嫁のやりとり

80歳以上 (転出: 9)

| 実家 婚出先 | 下 出 | 北 島 | 上 出 |
|-----------|-----|-----|-----|
| 下 出 | 8 | 2 | 8 |
| 北 島 | 4 | 1 | 4 |
| 上 出 | 3 | 3 | 12 |

50～70代 (転出: 10)

| 実家 婚出先 | 下 出 | 北 島 | 上 出 |
|-----------|-----|-----|-----|
| 下 出 | 4 | 0 | 4 |
| 北 島 | 1 | 4 | 3 |
| 上 出 | 7 | 2 | 8 |

転出した家があったり、その転出した家のあとへ移動したり、また二俣の中でも移動があったりしたようだが、表-3と同じ資料を用い、転出した家については位置が不明なものが多いので除くことにした。

表-4からはっきりしたことは読み取れない。どちらかというと80歳以上の方が同じ地区どうしの結婚が多いかもしれない。上出で数字が大きく北島で数字が小さいのは地区によって世帯数が違うためであって、調査した時点では下出は42世帯、北島で27世帯、上出は55世帯あった。隣の家へ嫁にいく例がいくつか見られたことは前に述べたが、地区的にはあまりこだわらないようだ。

3. 門徒による結びつき

二俣には本泉寺と静光寺の2つの寺がある。どちらも浄土真宗の寺であり、それぞれの寺に所属する門徒は決まっている。Ⅱではふれなかったが、寺の住職の家での婚姻は別格であって、たいてい村の外の同じ宗派の寺と嫁のやりとりをしているので資料の中にはいれなかった。しかし、静光寺の方は二俣の家から養子もらった例がある。本泉寺の二俣内の門徒は103世帯、静光寺の二俣内の門徒は寺のある北島を中心に20世帯ほどである(第11章参照)。寺に所属する門徒は決まっていってそれぞれの行事の世話をしたり参加したりするのだが、ある行事につい

ては両方に参加するという人もいるので二俣の人の中では意識的にそれほど違いを気にしないようだ。

表-5 寺の門徒別の嫁のやりとり

80歳以上（転出：9）

| 実家 \ 婚出先 | 本泉寺門徒 | 静光寺門徒 |
|----------|-------|-------|
| 本泉寺門徒 | 32 | 7 |
| 静光寺門徒 | 6 | 0 |

50～70代（転出：10）

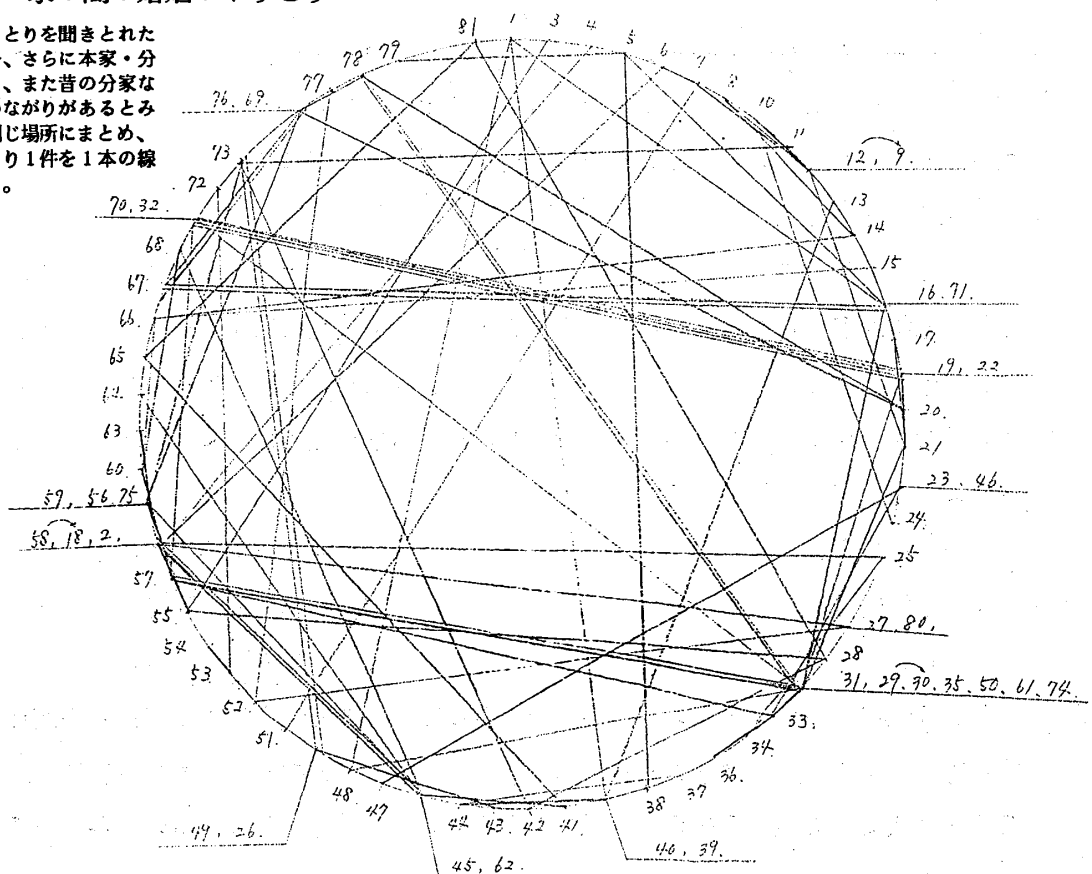
| 実家 \ 婚出先 | 本泉寺門徒 | 静光寺門徒 |
|----------|-------|-------|
| 本泉寺門徒 | 19 | 9 |
| 静光寺門徒 | 3 | 2 |

本泉寺と静光寺では門徒の数が大きく異なるのではきりとしたことは言いえないが、50～70代で静光寺門徒から本泉寺門徒の家へ嫁ぐものが多い。しかし、これは聞き取りの事例のかたよりによるものかもしれない。

二俣内では全ての家がどちらかの寺の門徒であるが、特に同じ寺の門徒だからといって婚姻のやりとりをすることはなかったようだ。しかし、富山など他の地域にいる同じ寺の門徒とは同じ寺の門徒であるという縁で結ばれることとなった婚姻はいくつかある。

図-1 家の間の婚姻のやりとり

婚姻のやりとりを聞きとれた81世帯の家を、さらに本家・分家のつながり、また昔の分家など何らかのつながりがあるとみられる家を同じ場所にまとめ、婚姻のやりとり1件を1本の線で表している。



さて、3つの点から家のつながりをみてきたわけだが、家格や経済状態による結びつきというのはあったことがわかった。しかし、それだけでつながっているわけではない。それでは、家と家は一体どのようにしてつながっているのだろうか。そこで、資料全体を図にしてみた(図-1)。これで見えていくと、例えばAがBの家へ嫁いで、BからCの家へすでに嫁いでいた時、Aの家で結婚相手を選ぶときにBの家を仲介としてAとCとの縁談が成立するといったようなつながりが少しみえてくる。そうしたやりとりの輪がそれぞれの家の者の縁談だけでなく同じ一族の者や親戚の者の縁談についても考えられるとしたら、このような無数のつながりにある程度理由があることがわかる。家格でのやりとりについても、もしかしたら昔からのやりとりによって、たいてい縁談の話をもってくる祖父や祖母や叔母などが、同じ家格の家に多いためであるという説明ができるかもしれない。

IV 結 婚 式

1. 結婚式の形式と変化

二俣の結婚についてはⅡでみたような通婚圏の広がりに伴って、その形式も変わってきているように思う。ここでは結婚式の場と形式によって次の3つの時期にわけ、それぞれの結婚式についてみていきたい。

- ① 1955年頃まで(嫁の現在の年齢が60歳以上) 二俣内での結婚式
- ② 1955年～70年頃まで(嫁の現在の年齢が40代後半～50代) 転換期
- ③ それ以後現在まで(嫁の現在の年齢が40代前半まで) 結婚式場での結婚式

(1) 1955年頃まで

二俣の中の家から家へ嫁入りすることがほとんどであり、年ごろになると親がたいていは家格のつり合いなどから結婚相手を決めていたようだ。女性が紙漉きをすることもあり、紙漉きの上手な人が喜ばれた。村の中の人々はお互いの家のことは大体把握していて、顔がわからなくても結婚相手やその家のことをまったく知らないというはほとんどなかった。正式な見合いもあったが、その他にお寺での詞堂経の時や盆踊りなど若者が集まる機会が見合いの役割を果たしていた。仲人は親戚縁者の中で世話好きな者が引き受けたが、仲人は着付けや髪結いの世話などもしなくてはならず、組頭などの家がおこなった。仲人は婿側からたてるが、本決まりになってくると嫁側も仲人をたてることがあったようだ。

結婚式は二俣内での移動であるためにそれほど形式ばったものでなく、ときには隣の家へ嫁ぐ場合もあったため、豊かさや家格によって多少差があったが簡略なものであった。

夜8時頃に紋付きの着物を着て叔母さん(母親の姉妹)が付き添い、婿側の兄弟のお手引きをして、堤灯をもった仲人の後からたんす、長持ち、ふとんなどの嫁入り道具と共に家の裏口から入った。仏壇参りをすませると、花嫁は仏間に夜明けまでずっと座ってなくてはな

らない。まわりでは親戚の者達がお酒を飲んだり話をしたりしているが、この晩たいてい婿はおらず隣の家か友達の家にいる。式に呼ぶ婿側の親族については後で述べる。

次の日、嫁の親が近所へ挨拶まわりをしてその夜披露宴をし、たもと酒といって、夫婦でお酒をついでまわる。たもと酒とはお祝に寄せられたお酒をふるまうことであり、式には参列できなかった親戚や近所の人達、友人などが呼ばれる。仲人と嫁の両親も呼ばれる。経済的に豊かな家では披露宴が3日間朝夜で6回、呼ぶメンバーをかえて行われ、たもと酒（後述）も3日間振る舞われたそう。

Dさん（77歳）は二俣で初めて打掛けを着て式をし、片町で記念写真をとったそう。式が終わったらすぐに二俣からよそへ行ったが、当時は最もハイカラな結婚式だったそう。

(2) 1955～70年頃まで

この時期には二俣以外からの嫁入が増え、町の結婚式の形がはいつてきて式も変わっていく。興入れの後、盃割り（後述）をして家に入る。仏壇参りをすませると仲人と婿と嫁とで三三九度をかわし、その後婿の親と親子の盃をかわす。しかし、この時婿がいないことも多い。その夜に近い親戚をよんで披露宴をおこない、次の日に遠い親戚や組の人をよぶ。嫁にくるときはおみやげとして風呂敷と饅頭を近所に配った。

Eさん（45歳）は金沢から白無垢姿でお嫁入りした。披露宴ではお色直しもしたそう。また、風呂敷を二俣の3分の2の家に配り、饅頭も500個用意したそう。

(3) それ以後現在まで

家で結婚式を行なうのは1970年頃まで、それ以降は金沢の結婚式場で行なう一般的なものとなる。結婚相手の選択の幅も広がり、金沢の職場での恋愛結婚や二俣以外の遠くの地域の人と見合いをするようになる。富山からお嫁さんをもたらるのがはやったり、石川県の能登の方からもらうのがはやったりした時期があるそう。今や通婚圏は全国規模に広がっている。

結婚式は全国的なものになったがたもと酒の習慣は残っていて、たとえば結婚式後に二俣以外の土地に住むことになっていても、式場からその日のうちに二俣へ戻ってきて同じ班の家に挨拶まわりにいき、たもと酒を行なってから次の日の新婚旅行にでかける。

Fさん（27歳）は最近では珍しく二俣の中で結婚式を挙げた。その様子を詳しく聞くことができた。

① 結納

話が決まったら男性側から女性側へ一升酒を持っていく。男性から女性へは留め袖と結婚指輪が、お返しにはスーツなどやまた家族それぞれにおみやげが贈られた。

② 嫁入り道具

仏壇参りの際にくぐるのれんと重箱を包む風呂敷は、嫁入りには必需品である。

③ 興入れ

仲人とお手引きの子が花嫁を家まで迎えに行く。式まで花嫁と花婿は顔をあわせない。

④ 盃割り

花嫁が到着すると両家から竹筒にいれてとってきた水を仲人夫婦が白杯に注ぎ、花嫁がそれを飲むまねをしてから玄関口の足元に投げて割る。それから玄関をくぐって家に入る。

⑤ 仏壇参り

花嫁はお手引きの子に導かれて、持参したのれんをくぐってひかえの間にはいる。

玄関から直接は仏間に進めない。花嫁はいったん控えの間に入り、そこで色打掛けから白無垢の着物に着替える。着替えたら、花嫁は仏間に入って仏壇に詣る。

仏壇参りがすむと結婚式となる。

⑥ 結婚式

嫁入り先の家で本泉寺の住職をよんで式を行なった。

⑦ たもと酒

嫁ぎ先の両親のいとこや祖父母のいとかなど式には参列しなかった少し遠い親戚や、それぞれの友人や会社の人、そして近所の班の人などを呼んで宴会をする。仲人や嫁の両親も呼ばれる。新郎新婦は客に酒をついでまわる。

* 婿養子を迎えるとき

養子を迎える時は、嫁もいったん隣の家や親戚の家などにいってそこで支度をし、改めて実家に入る。家には男女別に入り、そろって仏壇に詣る。

2. 結婚式での親戚付き合い

二俣のようにこれほど近くに親戚が多いとなると付き合いというものがかなり大変となってくるのではないだろうか。何かその家で行事があった時（ほとんどが冠婚葬祭である）、集まる親戚というのはどのくらいの範囲なのであろうか。ここでは結婚式の場合をみてみたいと思う。

Gさん（69歳）によれば、二俣の結婚式の場合に婿側が呼ぶ親戚というのは次の通りである。

① 長男の場合

長男の結婚式には母親の実家、母の兄弟、祖母の実家、祖母の兄弟、父親の兄弟、祖父の兄弟が呼ばれる。

② 次男以下の場合

長男の結婚式ではないときは、母の実家、母の兄弟、祖母の実家が呼ばれる。

また、Hさん（48歳）による結婚式で呼ぶ範囲は次のとおりである。

“同族”、いここにあたる家、先代にあたる家。

披露宴（たもと酒が行なわれる）では大体1日目に兄弟がよばれ、2日目にはおじとおばが、3日目には遠い親戚の人や同じ組の中の人によばれたようだ。

金沢の結婚式場での結婚式に呼ぶ親戚というのは、今でもだいたい上に述べた範囲に相当する親族が呼ばれている。Iさん(28歳)の場合は、おじやおばは夫婦で招待することがないので男ばかりになってしまったそうだ。

このような二俣へ嫁として二俣以外から入ってきた人達は、どのように感じているのだろうか。

8年前に二俣へ嫁いできたJさんは、最初はまわりに知らない人ばかりだし二俣の人々は屋号で他の家のことを話すので、初めのうちはなかなか覚えられず大変だったそうである。

4年前に二俣へ嫁いできたKさんは、自分の周りの人以外は二俣の人々のことはほとんど知らないそうだが、二俣へ来て不便に思うことは町から遠いということと、親戚付き合いが多くて、葬式や結婚式のときに、自分の知らない遠い親戚などにお金をださなくてはならず、出費がかさんで大変だということだ。

また、年配の人達は二俣中が親戚だという考えがあるようで、朝早くに起きたら茶の間におばあさんがあがってきていてびっくりしたという話もあるそうだ。都市や町で暮らしていた人にとっては隣近所でも赤の他人という感覚があるので、このような人付き合いの感覚の違いに驚くのはしかたないことかもしれない。

V まとめと考察

二俣でよく耳にしたのは「二俣では紙漉きをしていたので村内婚が盛んであった」という話である。だいたい女性が紙を漉いているので、嫁にもらうなら小さな頃から紙漉きをしている二俣の娘をということだったらしい。確かに婚姻のやりとりをみれば村内婚が多かったのは明らかであり、あの家のおばあさんはどここの家から嫁にいて、その家のおばあさんと兄弟であるなどという話をよく聞いた。二俣の人々はみんな親戚であるかのようだし、また、年配の人は二俣中が親戚であるといったような感覚の人が多い。

しかし地域内婚は、理由はいろいろとつけられるが、二俣に限らず他の地域でもよくみられた現象のようである。地理的な要因からみていくと、確かに二俣は山にかこまれた山村であるが、昔は本泉寺を中心に栄え、また金沢と富山を行き来する人々にとっては格好の宿場であったために他地域との交流はわりと盛んであった。それでは実際の理由は一体なんであるか。紙漉きのためなのか。

私は、それは人々の意識であるように思う。昔はきっと、地区の中での婚姻が普通であって、わざわざ知らないよそへどうしてだすのか、あるいはよそからもらうのかというのが村の人の意識だったのだろう。嫁にやるのも、もらうのも、全く見知らぬところへやって苦労させるよりも勝手の知ったところへやる方が安心だし、相手の家のことを把握していて紙漉きもできる嫁をもらった方が良いと考えたに違いない。特に嫁にやるほうとしては相手の家に縁者がいればさらに

安心であろう。さらに、二俣は世帯数が多いので、村の中だけででも十分に結婚相手をみつけることができたというのが大きく影響している。二俣は、村の中のことをだいたい把握できる大きさであったこと、そして結婚の相手が十分選べるような世帯規模であったということが、村内婚を可能にし、村内婚が普通であるという村の人の意識をつくりだすことになったのであろう。

二俣の人々は二俣の人であるというだけで、何かひとつの強いまとまりの意識を持っているように感じた。紙漉きをやっていたことも重なって、紙肝煎り、おやっさま、組頭、三十五人衆というしっかりとした組織で地区を自治的に運営していたこと、そしてさらに地区の中での婚姻のやりとりをしていたこと、これらが二俣が大きな集落のわりに一つにまとまってきた要因ではないだろうか。こうした人々の意識が村が複雑につながっているという印象をさらに深めていたのではないだろうか。

最近では若者がでていったりしているが、二俣は山の中といっても金沢へ車で通える距離であるし、子供の数はある一定のところからはそんなに減っていないので、過疎化に悩む農村というわけではない。ただ、二俣に残るとしてもほとんどが通勤で外に働きにでるために結婚相手は外の人になってしまう。これから二俣内での結婚が増えるということはほとんどないであろう。そうして外から新しく入って来る人が増えれば、家と家を結んでいた婚姻によるつながりはだんだんと薄れてしまうだろう。そしてさらに月日がたてば、二俣も都会と同じような付き合い方になってしまうのであろうか。

しかし、都市でもないし、村落でもない。この特色が二俣だからこそその独自の地域社会をつくっていく上で、重要なヒントであるかもしれない。